誠実性に関する自己呈示は報復的公正にどのように影響するか

偶発的問題場面における帰責判断を用いた発達心理学的検討

○石川勝彦¹・広政裕也²・村上太郎¹・松島暢志¹・橋瀬和秀³

(¹九州大学大学院人間環境学府・²(株)江崎グリーコ・³九州大学大学院人間環境学研究院)

キーワード：帰責判断・自己呈示・謝罪・報復的公正

How sincere self presentation by assailant effect on the evaluation of retributive justice?

Katsuhiko ISHIKAWA¹, Yuya HIROMASA², Taro MURAKAMI¹, Nobushi MATSUSHIMA¹ and Kazuhide HASHIYA³

(¹Graduate School of Human-Environment on Kyushu University, ²Ezaki Guriko Co.LTD, ³Graduate School of Human-Environment on Kyushu University³)

Key Words: attribution of responsibility, self presentation, apology, retributive justice

目的

他者の行為の意味を理解するとき、幼児期からこれを行為者の行為意図の観点から理解しうることが示されてきた

(Meltzoff, 1995)。しかしこうした行為の理解の形式に先だって、行為の意味を道徳的評価の観点から同一化しうることが示されている。3カ月～1歳から、援助行動を示す行為者を好み、他者の行為を阻害する行為者を嫌う傾向が1歳前からみられる(Wynn et al, 2000; Hamlin et al, 2010)。

しかし行為の同一化は、先行する文脈の考慮を必要とする。たとえば他人を邪魔する行為が、以前もたらされた被害に対する報復である場合、これは悪い行為だろうか。

報復は対象に危害を加える点では悪いとも言えるが、報復的公正(加害者と被害者の間に公平を回復する)の点からは良いともいえる。年長の幼児は報復に理解を示す(越中, 2007)ことから、行為の善悪を、先行する文脈を考慮して評価する能力が幼児期から獲得されることが示唆される。

さらに、先行する被害に対し報復が「妥当」であるかどうかにも再び先行する文脈に依存するだろう。本研究では、報復の妥当性が加害者からの自己呈示によってどう変化するのかを検討した。具体的には加害者が誠実な謝罪を行う、不誠実な他責的自己呈示を行うなどの操作を実験的に行って、報復に対する評価の変化を検討した。これによって道徳的判断・報復的公正判断における誠実性の効果をどのように認知するのかを発達的に検討した。

方法

被験者 成人30名・幼児(range:60ヶ月～74ヶ月 平均:67.6ヶ月 SD=3.45)計37名(男児22名 女児15名) 刺激・条件 動画には二人の人物(始発者/応答者)が登場する。応答者が積み木を重ねて遊んでいるところに始発者が登場し、つまづいて積み木を壊してしまう。その後、(1)「謝罪条件」では『ごめんなさい』と発話(2)「弁明条件」では『わざとじゃないんだからいいでしょ』と発話(3)「転嫁条件」では『この子がやったんだよ』と傍観者に責任を転嫁(4)「統制条件」として、始発者が自己呈示を行わない条件。手続き・質問 動画刺激を提示後、「どっちの人物が悪い?」と尋ね①始発者が悪い、②応答者が悪い、③両方悪い、④両方良いという選択肢を設け、1つを選ばせた。成人は一人あたり全ての条件に回答し、幼児は1条件に回答した。

分析 それぞれの選択肢を選んだ人数を条件ごとに集計し

図1 刺激例(弁明条件)

た。さらに、始発者が行った自己呈示が、帰責判断にどのように影響したのかを確認するため、統制条件とそのほかの条件において、始発者に帰責される比率を比較した。具体的には、排他的に帰責されれば1点、同時に帰責されれば0.5点を与え、条件間で得点の差を検定した。

結果

条件ごとに、4択のどれが選択されたのかを集計した。

成人 統制条件ではほとんど始発者には帰責されなかった。1要因分散分析の結果主効果が有意であり($F_{(3,29)}=76.88$, $p=.000$)、弁明条件($p<.000$)と転嫁条件($p<.000$)において始発者への帰責が増加した。そのほかの条件間の差を確認すると、謝罪-弁明($p<.000$)、謝罪-転嫁($p<.000$)に差があるが、弁明-転嫁には差がみられなかった。

幼児 統制条件では多くの被験児が始発者に帰責した。1要因分散分析の結果主効果が有意であり($F_{(3)}=3.37$, $p=.030$)、謝罪条件($p<.007$)において始発者への帰責が減少した。

考察

本調査は、報復的公正判断にあたる加害者の誠実性に関する自己呈示の影響を調査した。成人は偶発的に生じた棄損に対し報復が過剰であると判断し、幼児は報復が妥当だと判断するという大きなコントラストが見出された。この差異の背後には棄損の原因(偶発的/意図的)に対する態度形成の違いがあるのかもしれない。

自己呈示の誠実性を操作したところ、成人・幼児ともに自己呈示が不誠実であるほど帰責が高まったことから、報復的公正の評価は棄損の原因に専一的に基づくものではなく、後続のコミュニケーションに基づく社会的な過程であり、幼児もこうした推論をすでに獲得していることが示唆された。

しかし誠実さに対する評価に年齢差がみられた。幼児では謝罪によって報復感情が低減したものの、成人とは異なり不誠実な自己呈示がこれを高める結果にはならなかった。今後こうした結果を引き起こす原因を調査する必要がある。具体的には、加害責任の認知(偶発的/意図的)、報復的公正に対する評価(どの程度の報復を許容し、また過剰視するか)を操作して実験を繰り返す必要があるだろう。

図2 始発者に帰責した得点の条件間比較